

# 北海道旭川商業高等学校

課程： 定時制  
 学科： 商業科  
 生徒数： 33名

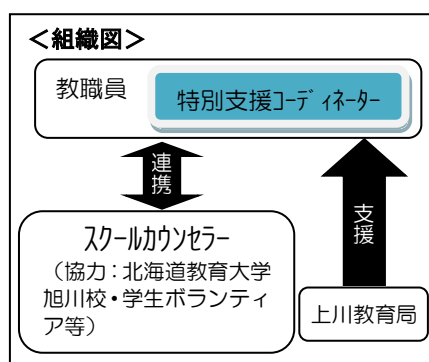
## 1 取組の特徴

- 1 集団カウンセリングの手法を用いて、生徒の自己理解の深化を図る。
- 2 生徒に、コミュニケーションの基本を学ばせ、他者との関わり方や距離感を身に付けさせるとともに、集団における自身の役割を理解させ、豊かな人間性を育成する。
- 3 教員による生徒の変容を促すアプローチや指導の質を上げるために、組織的・継続的な指導ができるよう、教員の資質・能力の向上を図るための意識を醸成する。

## 2 取組のねらい

本校では、不登校や基礎的・基本的な学力が身に付いていない状況で入学してくる生徒が多い。また、メタ認知能力が低く、夢や目標を掲げて、前向きに考えたり行動したりすることが苦手である。加えて、他者を理解することはもとより、コミュニケーションを図ることも苦手である。

このような生徒の実態を踏まえ、生徒にコミュニケーション能力、自己肯定感や自己有用感を醸成するため、本事業の取組を通して、集団の中における自分の役割を意識させるとともに、学習活動や教育活動において、協働して取り組むことの意欲を醸成する。



## 3 取組の経過

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>4月 ・ 校内研修(新入生の情報共有)</li> <li>5月 ・ 校内研修(全校生徒の情報共有)</li> <li>6月 ・ 宿泊研修<br/>「コミュニケーショントレーニングの実施」<br/>○場所: ネイパル深川<br/>○講師: ネイパル深川の職員</li> <li>7月 ・ 「ほっと」、「アセス」実施<br/>・ 自殺予防(薬物乱用防止教室)<br/>○講師: 旭川中央警察署署員<br/>・ 生活体験発表に向けた言語活動<br/>・ 生活体験発表校内朗読会</li> <li>9月 ・ 道北支部生活体験発表大会への参加</li> <li>10月 ・ 集団カウンセリング授業①<br/>・ 「ほっとプラス」実施(1学年)<br/>・ 校内研修(授業評価アンケート)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>11月 ・ 保健講演会<br/>☆テーマ: 「性や性感染症の正しい知識・自分と相手を大切にする行動」<br/>○講師: 旭川市保健所職員<br/>・ 自殺予防教育プログラム<br/>☆テーマ: 「心の健康」12月</li> <li>12月 ・ 集団カウンセリング授業②<br/>・ 「ほっとプラス」実施(1学年)</li> <li>1月 ・ 「アセス」実施(4学年)</li> <li>2月 ・ 集団カウンセリング授業③<br/>・ 「ほっと」・「アセス」実施<br/>・ 校内研修会</li> </ul> <p>【通年実施】<br/>         ソーシャルスキルトレーニング、学校行事、生徒会活動、部活動を通じた人間関係形成</p> |
|--|---|

## 4 取組の内容

### 1 集団カウンセリング授業

#### (1) 目的

高校生の不登校や中途退学の事由として、「人間関係をうまく保てない」などの生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の不足によるものがある。このような状況を改善し、退学等の未然防止のためのカウンセリングやトレーニングを実施する。

#### (2) 対象

定時制商業科1学年 17名

#### (3) 内容

臨床心理士の寺崎真一郎氏(スクールカウンセラー)を中心に、本年度3回実施した。集団カウンセリング授業を通してコミュニケーション能力の育成と向上を図った。生徒が4つのグループになり、大学生(北海道教育大学旭川校)や保育士がファシリテーターとして、それぞれのグループに1名ずつ加わり授業を展開した。

#### (4) 授業の流れ

##### ア 1回目 10月10日(火) 2～3校時

- ・講師の自己紹介とスタッフの自己紹介
- ・アイスブレイク「イチポン」
- ・プログラム①「相談しやすい人間関係～上手な聴き方とあたたかい言葉かけ」
- ・プログラム②「印象判断」
- ・プログラム③「相手のいいところを書いてみよう」
- ・プログラム④「全員でイチポン」
- ・感想発表・振り返りの感想文の記入

##### イ 2回目 12月11日(月) 2～3校時

###### 第1テーマ「他人のいいところを探す目を育てよう」

- ・プログラム①「相手の良いところを探そう」
- ・プログラム②「相手の良いところ探しのコツ」上級編

###### 第2テーマ「ことばの力のすごさを感じよう」

- ・プログラム①「ジェスチャーゲーム」
- ・プログラム②「伝言ゲーム」レベル2

##### ウ 3回目 2月5日(月) 2～3校時

###### ○プログラム①「あなたは地球を救う調査隊の一員」

- ・調査隊の名前を決める。
- ・自分はどんな職業か、そしてどんなことで役に立つのかを班に説明する。
- ・どんなものを持っていくかを班で話し合う。(10個から3個を選ぶ)
- ・地球を離れる時に最後にやっておきたかったこと
- ・自分が苦しい時に支えになったもの、言葉はどんなもの?
- ・地球からの贈り物

###### ○プログラム② 全体シェアリング (全体共有)

###### ○振り返りとアンケートの実施

#### (5) 授業の様子



【ジェスチャーゲーム】



【全員でイチポン】



【印象判断】

## (6) 生徒の感想

- ・今日は、色々な人と話せてとても楽しい時間を過ごせて良かった。(1回目)
- ・次は体育館でやりたい。スポーツしたい。楽しかった。また、来て下さい。(1回目)
- ・自分が引き気味なので、話しかけてくれて嬉しかったです。(1回目)
- ・初めて会う人なのにフレンドリーに会話できたので楽しかった。(1回目)
- ・1回目よりとても楽しかった。もっと長くして!!!!(2回目)
- ・時間が足りない。話しかけてくれて嬉しかった。(2回目)
- ・みんなにいいところを言われるのは、恥ずかしかった。楽しかった。(2回目)
- ・誉められて嫌なことはないと思った。また、この授業をしたい。(2回目)
- ・1回目から楽しくできて、色々な事を学びました。(3回目)
- ・少ない時間だったけど、楽しめたのでよかった。(3回目)

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

#### (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

本年度、中途退学者は1学年が4名であったが、今年度の入学者数は、昨年度の2倍の入学だったことから、中途退学者の割合は昨年度と比べて減少した。

#### (2) その他の指標による評価

「ほっと」、「アセス」を実施することで、生徒の悩みを把握し、教員による効果的な支援について方策を立てることができた。

#### (3) 「ほっと」で把握できた生徒のコミュニケーションスキルの概況

学級全体では、ほぼ平準しているが、個々の生徒の結果には差があることが分かったことから、生徒一人一人に対するきめ細かな指導の在り方を検討するきっかけとなった。

#### (4) 生徒の変容

- ・1学年において、不登校だった生徒が多数在籍しているが、コミュニケーション能力の向上や「ほっと」等の結果を踏まえた生徒への支援によって、現在は、ほとんど学校を休むことなく登校している状況である。
- ・本取組におけるアンケート結果から、「他者とコミュニケーションを図ることの楽しさを実感することができた」との声が聞かれた。

### 2 課題

(1) 入学間もない年度当初において、生徒同士や生徒と教員との人間関係がまだ構築されていないことから、1学年の早期から集団カウンセリングに係る取組を行う必要がある。

(2) 生徒の実態に応じた分かりやすい授業となるよう、学習内容や指導方法を検討する必要がある。

### 3 次年度に向けて

(1) 1学年の早い段階で集団カウンセリング授業を実施する必要がある。

(2) 生徒の実態に応じた授業の工夫・改善を図り、分かりやすい授業が実施できるよう、校内研修や校外で行われる各教科の研究会等に積極的に参加する必要がある。

# 北海道苫前商業高等学校

課程： 全日制  
 学科： 商業科  
 生徒数： 49名

## 1 取組の特徴

本校は親元を離れ寮生活を送っている生徒が全校生徒の約半数を占めている。家庭事情や中学校までの人間関係等の諸事情により、基本的な学習や生活規律の確立、保護者からの自立等、「中学校までの生活をリセットする」ことを目標として入学をしてくる生徒が多い。

寮の運営等、地域から様々な支援を受けながら生徒のサポートに取り組んでいるが、特に最近では中学までの不登校傾向の原因が複雑化している生徒が増えてきている状況である。

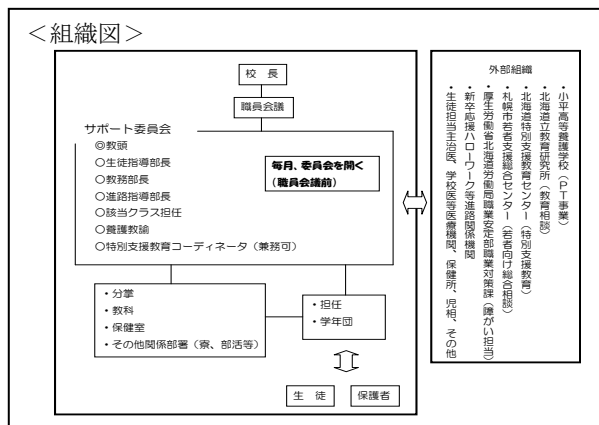
本校では、遠隔システムなどICTを有効に活用したり、外部からのカウンセラーの力を借りたりして教員の生徒理解のスキルを上げることにより、生徒一人一人の日常の心の動きを教職員全員で把握し生徒に自己肯定感をもたせることや、問題の未然防止に向けた個々の生徒にあった問題の解決方法を生徒と共に考えていくことを重点に全校一丸となって取り組んでいる。

## 2 取組のねらい

昨年度の研修をもとに、様々なケースに対応するための個別へのアプローチ及び集団への予防的アプローチについて深める。

また、緊急な問題を抱えている生徒に対する自殺予防教育の中で行われる、集団への予防的アプローチに対する教員の理解を深める。

<組織図>



## 3 取組の経過

- 4月1日 新入生及び在校生の情報共有
- 4月5日 校内研修会の実施 (生徒理解)
- 4月20日 校内研修会の実施 (教育相談週間)にむけて)、校内生徒サポート委員会の開催 (毎月1回)
- 4月21日～23日 宿泊研修で「リレーションとルール構築」のための活動実施 (場所: ネパール深川、講師: ネパール深川職員、引率教諭)
- 4月26日 「ほっと」の実施
- 5月9日～26日 「苫商トーク」の実施 (教育相談週間)
- 6月1日 「アセス」の実施
- 6月12日 校内研修会の実施 (生徒理解、ほっと・アセス・苫商トークの結果)
- 6月14日 ボランティア活動 (町内施設清掃、縦割り班編成)
- 7月7日 SC来校による、生徒・保護者・教員個別面談
- 7月28日 SC来校による、生徒・保護者・教員個別面談
- 8月28日 自殺予防教育に関する校内研修 (教職員)

- 9月10日 担任による自殺予防教育①
- 9月24日 SCによる自殺予防教育②  
および生徒・教員個別面談
- 10月24日 SCによる自殺予防教育③  
および校内研修  
演題: 自殺予防教育の下地づくり  
～生徒と教師が共にコミュニケーション能力を高めるために～  
講師: 北海道公立学校SC 井上 重美氏
- 10月26日 担任による自殺予防教育④
- 12月8日 「ほっと」の実施
- 12月18日 「アセス」の実施
- 1月17日 校内研修会 (生徒理解、ほっと・アセスの結果)
- 1月18日～23日 「苫商トーク」の実施 (教育相談週間)
- 2月8日 ボランティア活動 (町内除雪、縦割り班編成)
- 2月15日 次年度の取組にむけて  
～評価のまとめ～

## 4 これまでの取組の内容

### ○ 自殺予防教育の下地づくりとしての取組

- ① ねらい：「援助希求的態度の育成」「ストレス対処スキルの育成」にむけて、その下地づくりをねらいとした集団カウンセリング等を実施する。
- ② 対象：1・2学年
- ③ 内容：生徒の状況等を踏まえ、早期の問題認識（北海道全体計画④の自殺の現状等）について教職員を対象に研修会を実施し、取組を行う理由について共通理解を図った。集団カウンセリングは「ほっと・アセスの結果」と担任が考える「どのようなクラスにしたいか」という願いをもとに方策を選定し実施した。また、取組の振り返りとしてSCによる校内研修会を実施した。

### ④ 全体計画

日	時間	実施学年等(1年)	実施学年等(2年)	備考
8/28(月)	放課後 15:40～ 16:30	早期の問題認識(心の健康) ～北海道の自殺の現状等について～		教職員向け 視聴覚教室
9/7(木)	LHR	・「ほっと」 15分 ・エゴグラム 50分	・「ほっと」 15分 ・エゴグラム 50分	担任実施 (LHR)
9/21(木)	2校時	「自分の考えを言う」 ロールプレイ 方策3:アサーション		視聴覚教室 (保健)
	3校時		・「一人一人違うことを認め合う」 二者択一 方策2:エンカウンター	視聴覚教室 (保健)
	4校時	1・2学年合同「傾聴」トレーニング 方策4:ソーシャルスキルトレーニング		視聴覚教室 (保健)
10/24(火)	5・6校時	1・2学年合同ピア・サポートプランニング 「仲間同士支える」 方策5:ピア・サポート 「よいところ探し・ありがとうの花束」 方策2:エンカウンター		視聴覚教室 (保健)
	放課後 15:30～	SCによる校内研修会		教職員向け 視聴覚教室
10/26(木)	LHR	3年後の自分(企画、手だて) ほっとの実施、振り返り 方策1:ガイダンス		担任実施 (LHR)

### ⑤ 生徒の感想より

- ・相手の気持ちも自分の気持ちも大切にすることが必要だと思った。「さわやかさん」は2人が納得する方法を探して提案しなければならないので難しかった。
- ※「さわやかさん」～ロールプレイでの役割
- ・言われて嬉しいことは、とても大切な人に言われるとより嬉しいと思った。また、急に言われ嬉しい言葉は、普段自分が言われて嬉しいと思うものより、より嬉しく感じると思った。
- ・自分の仕草一つで会話自体が変わることに気付いた。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

#### (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

	H29	H28	H27	H26	H25	H24
退学	5	1	2	0	3	2
不登校	0	0	0	0	0	0

- ・保護者や寮、地域の保健師等との連携により、不登校の未然防止には成果を感じるが、傷病や帰属意識がもてない等の理由で他校への進路変更があり、今年度は退学者が増えた。

#### (2) その他の指標による評価

	H29	H28	H27	H26	H25	H24
保健室 来室者数	232	361	554	462	419	376

- ・相談活動においてはS Cや地域保健師との連携が進み、様々なケースに対応することができたこともあり、保健室来室者数を減らすことができた。

#### (3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

自己表現系に比べて他者配慮系が低い傾向にある。「表明」に比べて「礼儀」「参加」「配慮」の項目が低い。

#### (4) 生徒の変容した姿

集団カウンセリングでは普段の授業とは違った生徒の姿を見ることができた。自己表現が苦手な休みがちであった生徒が、いろいろな生徒とコミュニケーションを取れる場を経験し、少しずつ自己表現ができるようになってきた。また、教師に対し否定的な態度をとる生徒に対し、集団カウンセリングを介入のきっかけとした相談活動を展開し、問題の未然防止につながったケースもあった。

### 2 課題

教師による観察や指標による評価から、取組に対して否定的な態度をとったり、とまどいを見せたりする生徒も一定数いることにより、教師が指導の難しさを感じていることが課題である。また、全校生徒が少ないため、行事等でこれまでと同様の成果を期待することが難しい状況であるが、少人数だからこそできることもあるという視点で活動等の計画を立てていく必要がある。

### 3 次年度に向けて

- (1) 少ない人数でも効果を最大限に高めるため、集団カウンセリングの進行をさらに工夫す必要がある。
- (2) 集団カウンセリングを得意とする教師もいれば、苦手とする教師もおり、このことは生徒も同様である。また、教師が進行する際の「振り返り」では、よい雰囲気にするための言葉かけに難しさを感じるという意見が多かった。  
次年度以降、実践と評価を重ねつつ、本校独自のプログラムを作成し、年間の計画に位置付けていく上では、さらに内容を検討することに加え、教師がスキルアップする必要がある。  
また、日頃から、「安心・安全感」につながる学級づくりの基本ルールの定着に向けて取り組む必要がある。
- (3) 多様な取組が期待できる学校間連携及び異校種連携について検討を進める。特に特別支援学校と連携した取組の実現に向けて具体的な検討を重ねる必要がある。